

足根骨癒合症

症状

足根骨癒合症とは

本来は動きのある2個以上の足根骨（足の甲から踵の部分に存在する7個の骨）の間が部分的または完全に癒合（くっついてつながること）することによる痛みなどの症状を認める疾患です。

症状

成長期にスポーツ活動や軽い外傷（けが）をきっかけに癒合部位の痛みで発症することが大多数で、癒合部のでっぱりに触れることもあります。また、土踏まずから母趾の裏側にかけてのしびれを伴う知覚異常や、足の外側の筋緊張が高まることによる可動制限を認めることもあります。

原因・病態

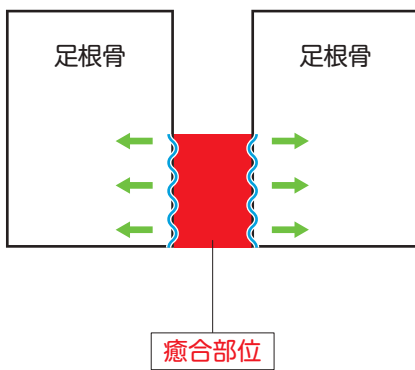
原因

骨の発育障害が原因である先天性疾患と考えられています。

病態

骨の間の正常な動きが制限されて癒合した骨の周囲の負荷が大きくなり痛みがでます（図①）。癒合部位が成長過程で柔らかい線維や軟骨成分の組織から硬い骨組織に変化していくことで癒合部周囲の負荷が大きくなるため、成長期のスポーツ活動時に発症しやすいという特徴があります。癒合部位としては①距骨・踵骨間、②踵骨・舟状骨間、③舟状骨・第1楔状骨間の順で頻度が高くなります（図②）。

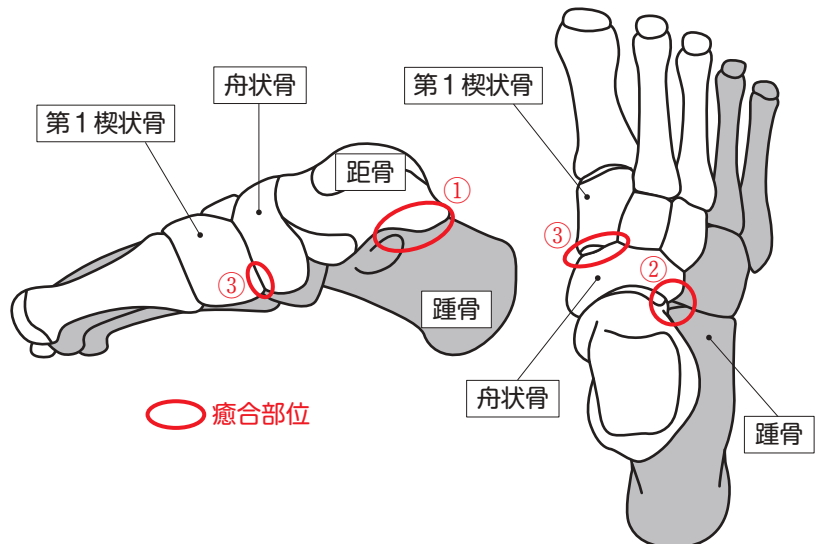
（図①）▼



～ 正常な動きが制限される

→ 骨に負荷がかかる

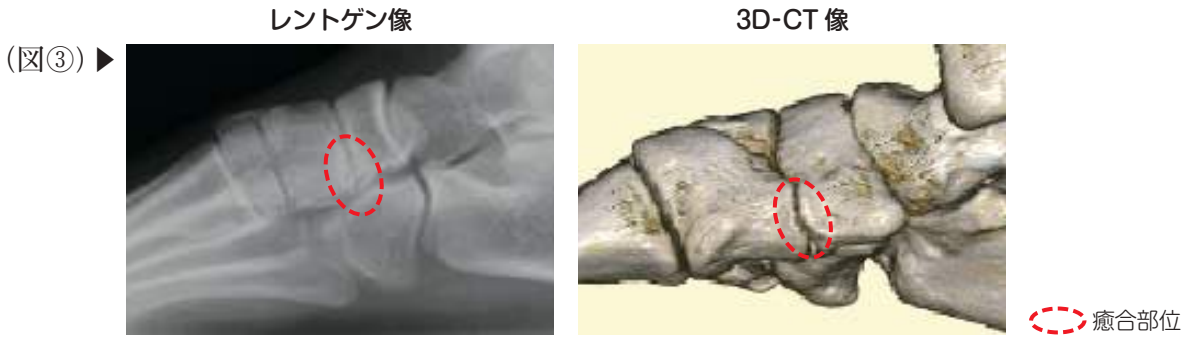
（図②）▼



診断

以下の症状が認められた場合、足根骨癒合症と診断されます。

- 歩行時または運動時に痛みを認め、癒合部を圧迫すると痛みが強くなる。
- 赤み、熱感などのいわゆる炎症症状は認めない。
- 画像検査で骨の形態異常が確認できる（レントゲン像で分かることもあるが、3D-CT像の方がより明瞭に示されます）（図③）。



治療

保存療法

- スポーツ活動制限、足底挿板の使用、靴の調整、ギブスまたは装具による外固定によって癒合部への負荷を軽減する。
- 活動性の変化によって症状が再発することもあります。

手術療法

- 癒合部位を切除する方法が一般的であり（図④）、近年では癒合部によっては鏡視下手術も可能となってきました。
- 距骨・踵骨間の癒合症では癒合部位の骨だけでなく併発するガングリオン（良性腫瘍の一種）を同時に摘出することもあります（図⑤）。

